児童が自ら考え，表現する授業の手立て

–教材との出会わせ方を中心に–

高度学校教育実践専攻　　実習責任教員　木下　光二
教員養成特別コース　　実習指導教員　藤原　伸彦
稲　留　愛　　専任教員　江川　克弘

1．課題設定の理由

筆者は，児童が考えを表現し合うことで学びを深め，ねらいを達成できる授業をつくりたいと考えている。なぜなら児童が自身の意見を認められながら学びを深め，達成感を得ることで，意欲的に問題解決に取り組むことができると考えたからである。

そう考えるきっかけになったのは，大学院１年次の鳴門教育大学附属小学校での授業観察において，児童が考えを表現し合うことで，学習目標を解決し，達成感が得られる学習が展開されていたのを目の当たりにしたからである。そこで，授業観察した授業，第６学年算数『分数のかけ算について考えよう』の中から印象に残った場面を取りあげる。

(1)ベテラン教師の実践（算数科「分数のかけ算について考えよう」：2012 年 5 月 9 日より）

「積が１になる式をつくってみよう」と学習課題をもたせ，初めは自力解決の時間を設定し，後に全体で解決を図った。ここで最も印象に残ったことは，教師も児童も一人の意見を尊重し，全員で力を合わせて解決にあたっていたことである。ベテラン教師の発問には「ひとりで分からないときはみんなで考える。それが一番大事。自分が分からないときこそ深く勉強できるから」「○さんは，どういうことが言いたいのか？」「誰か説明できる人？」「はい，○さんが言っていることは…」と，繰り返し児童の意見を引き出していた。そして児童同士が表現し合うことで，被乗数と乗数の関係性（逆数の関係性）を導きさせ，そのきまりを見出す楽しさを味わわせながら，逆数の意味を理解するねらいを達成させていた。児童が自ら考えを表現し合うことで課題を解決でき，まさに集団で学ぶ意義を実感させられた瞬間であった。

しかしながら，筆者の授業実践は，理想とかけ離れたものであった。以下，大学院１年次の実践第６年生社会『新しい日本，平和な日本へ』を取りあげる。

(2)筆者の授業実践（社会科「新しい日本，平和な日本へ」：2012 年 12 月 5 日より）

本時では戦争が終わった後の日本社会に興味関心をもち，戦前と比べて調べたいことや疑問に思ったことをまとめていくことが目標であった。そこで，本時のねらいに迫ることのできる教科書の写真資料３枚（戦後の街の様子）を児童に提示し，考えたことを発表し合わせることで，ねらいが達成できると考えた。しかし，前時の振り返りをすることなく，「写真から気付いたことを発表しましょう」と，めあてをもたせると，「電車が通っている」「ビルがある」などの発言だけで終わらせてしまい，復興について

気付きや関心を引き出すことができなかった。また，実践中に筆者自身が児童に何を考えさせたいのか分からず，発問や活動も意図がないまま進めたことから，深まりのない学習になってしまった。

以上のことから，児童に何を考えさせ，深めていくかのねらいを捉える力と，ねらいに迫ることのできる教材の出会わせ方に課題があることがわかった。

２．研究の目的と方法

(1)研究の目的

児童が自ら考え，表現する授業づくりをめざし，本時のねらいに迫ることのできる教材との出会わせ方を考える。

(2)研究の方法

①児童の実態把握について

実態に合わせたねらいに迫る手立てを考えることができるように，アンケートや日常生活での観察を行い，実態を把握する。

②課題設定，教材の工夫について

児童の実態と照らし合わせた課題設定を行い，ねらいに迫ることのできる教材の工夫をする。

③学習活動について

学びが深まる学習活動や表現し合う場の設定を考える。

④児童の変容について

ワークシートや振り返りシートなどを活用して，授業後の児童の変容を捉えられるようにする。

３．授業実践の分析・考察について

大学１・２年次に行った授業実践をまとめる。

対象は配属学級の第６学年，児童数は㋐が３７名，㋑・㋒が２６名で，実践日と単元は以下のとおりである。以下，項目ごとに分析・考察した，成果(○)と課題(●)をとりあげる。

㋐	実践１：国語科『カンジー博士の漢字クイズ大会』(2013.1.31)
㋑	実践２：道徳『困難を乗り越えて』(2013.6.11)
㋒	実践３：理科『大地のつくりと変化』(2013.11.25)

(1)児童の実態把握について

㋐『カンジー博士の漢字クイズ大会』より

○漢字に対する意識をアンケートで把握できたことにより，苦手な児童が視覚的にも漢字の良さに気付ける例文を用意することができた。

㋑『困難を乗り越えて』より

●困難を乗り越えたときの体験を振り返ることができるアンケートを行ったが，項目が幅広くなってしまったことにより，「困難を乗り越えたとき」に焦点を当てられず，ねらいに迫りづらくなってしまった。また，実践中は「どんなことを書いたか発表できるかな」という曖昧な発問をしてしまい，児童は何を発表したらよいのかわからなかった。困難に立ち向かった経験について焦点を当てた発問やアンケートを発表させるべきであったと考える。

㋒『大地のつくりと変化』より

○単元を通して授業実践を行っていたため，アンケートは取らず，毎時間ごとの感想を元に次時の実践に役立てることができた。

(2)課題設定・教材・教具の工夫について

㋐『カンジー博士の漢字クイズ大会』より

○漢字の総数を表す数字カードや一覧表を用いることで，視覚的にも漢字の総数を理解することができ，楽しい雰囲気で本時の課題をもつことができた。

○実態を踏まえて出題の仕方を工夫したことで，児童が主体的に活動に取り組むことができた。

㋑『困難を乗り越えて』より

○写真・詩画・ＶＴＲ・本の一節と段階を踏ん

で，教材（星野富弘さん）と出会わせた。ＶＴＲ視聴前に，手で描かれていないことを伝えると，「え？」と驚く児童の姿が見られた。星野さんについての説明から入らず，写真や詩画を通して少しずつ人物像に迫っていくことで，教材に関心をもつことができたと考えられる。

○星野さんの人物像に迫ることのできるＶＴＲを視聴した後，場面ごとに印象に残った部分を話し合わせると，多くの発言があった。星野さんの人物像に迫ることで，心が揺さぶられ，児童の発言を引き出すことができたと考える。

●詩画やＶＴＲなどと出会わせたときの児童の発言を拾ったが，問い返しのないまま教師の解釈で進めてしまう場面が見られた。児童の考えをや理由を引き出す問い返しを行えると良かったのではないかと考える。

㋒『大地のつくりと変化』より

●実物のボーリング試料，写真の資料，柱状図を用いることで学校の地面の様子を明らかにすることができるように設定し，班で観察させると，気付きを共有し合うことができていた。しかし，資料を読み取れない児童も何人かいた。特に柱状図は工事現場で使われている資料であり，短時間で読み取ることができていなかった。児童の実態に合わせて，どこまで教材の価値を読み取れるかを想定して，補足などの支援があると良かったのではないかと考える。

(3)学習活動について

㋐『カンジー博士の漢字クイズ大会』より

○学びが深まる問題や班活動，全体で共有する場を設けることにより，児童の知識・理解を深めることができていた。

●まとめの時間に個人で間違いやすい漢字について押さえる時間がなかった。班活動であっても個人用のワークシートなどを用意しておいても良かったのではないかと考える。

●班活動の時間に答えだけを発言する児童や合図の前に解答カードをあげてしまう班があり，班対抗戦のよさが活かせなかった。班活動を行うにあたって，話し合いの仕方を設定すると良かったのではないかと考える。

㋑『困難を乗り越えて』より

●星野さんが書き始めたときの文字と現在の詩画を比べ，「これから，これになるまでに，どうしてこんな，なれたんかな？」と発問し，頑張り抜く背景に迫った。「たくさん練習した」「あきらめずに頑張った」と発言があったが，「まだある？」「○くん，どう？」と広げてしまった。理由を尋ねたり問い返したりすることができず児童が自身の経験と照らし合わせられなかった。一人の発言を深めていくことで，星野さんが特別ではなく，成し遂げようとする強い意志や目標を持つことの大切さに迫ることができたのではないかと考える。

●星野さんの著者の一節を読み，星野さんの心情の確信に触れることで，自分の考えを深められることができたのか確認ができなかった。

●教材と自分を照らし合わせて考えたり感想を述べたりする時間がなかった。単元の時間構成も考慮すると良かったのではないかと考える。

㋒『大地のつくりと変化』より

○班活動で観察させたことで，それぞれの気付きを表現することができていた。

●全体で気付いたことを発表し合う時間がなく，それぞれの班の気付きを共有できなかった。

(4)児童の変容について

㋐『カンジー博士の漢字クイズ大会』より

●個人用のワークシートを用意していなかった

ため，一人一人が何に課題意識をもったかが分からなかった。班活動であっても，必要に応じて個人用のワークシートを用意したり，ノートに取らせたりすると良いと考える。

㊷『困難を乗り越えて』より

○振り返りシートを使用したことで，児童が何を考え，学んだのかがわかった。

㊼『大地のつくりと変化』より

○毎時間ごとに感想を書かせていたため，前時までの児童の理解度を把握した状態で実践を行うことができた。

4．成果と課題について

以下，４つの観点から研究の成果と課題の結果をまとめる。

(1)児童の実態把握について

・アンケートや振り返りシートによって児童の実態把握をすることで，より児童の生活体験や児童の思考に合わせた授業構想が実現できるとわかった。そのためアンケートの項目は，ねらい迫ることのできる内容に精選する必要がある。

(2)課題設定，教材の工夫について

・児童の実態に合わせた出題の工夫や教材の選択，ねらいに迫ることのできる教具の提示を取り入れることで，児童が自発的に考えを表現できる。

・教材に共感や疑問をもたせながら段階的に出会わせることで，関心が深まる。

・教材と出会わせるときの発問や児童の発言を活かす問い返しを行うことが大切である。

・児童の実態に合わせて，どこまで教材の価値を読み取れるか想定する必要がある。

(3)学習活動について

・班活動や全体で表現する場の設定など学習活動を工夫することで，学習が深まっていく。

・ワークシートなどを効果的に使い，自分と照らして考える時間の設定を行う必要がある。

・最も児童に考えを表現させたい場面を絞り，時間配分を調整する必要がある。

(4)児童の変容について

・学習時間で発言していない児童であっても，どのように学習を捉え，教材と向き合っていたかが振り返りシートで把握できる。

5．研究のまとめ

児童が自ら考え，表現する授業を行うために，児童の実態に合わせてねらいを定め，教材の取り扱い方や出会わせ方を考えて行うことが大切であるとわかった。

大学院１年次は，ねらいに迫ることのできる教材さえ提示すると，児童が考えを表現し，学びが深まると考えていた。しかし，本研究を進めていくうちに，児童の実態と合わせて，教材とどのようにかかわらせるかを考慮し，教材の工夫や学習活動の工夫，発問など，具体的な手立てに基づいて実践できるようになった。

教材とかかわらせたときの児童の発言を活かしていくことが今後の課題である。本研究の成果と課題を活かし，児童にとって，考えを表現したいと思える授業が行える教師をめざして，今後も実践に励んでいきたい。

【参考文献】

・ 八木正一・上條晴夫（2005）『これだけは身につけたい授業づくりの基礎・基本』学事出版株式会社

・ 有田和正（2006）『教材開発で授業はどう変わるか』明治図書出版株式会社

・ 東洋，中島章夫，梶田叡一（1982）『授業改革事典』第一法規出版株式会社